

「秋田大学学生海外短期研修支援事業」実施報告書（参加学生）

平成 26 年 9 月 8 日

所属：医学部保健学科看護学専攻 学年：3 年

氏名：由良 彰弘

研修先大学・機関名等（国）：王立ブータン大学健康科学院（RIHS）

在籍身分：学生

渡航年月日：2014 年 8 月 24 日

帰国年月日：2014 年 9 月 7 日

○研修先での学習内容等

主に RIHS での講義や附属の病院、地域にある satellite clinic や Basic Health Unit と言われる医療機関でブータンの医療の現状を学習した。RIHS の看護学生は英語で日本の看護教育と同じような学習をしていた。ブータンは乳児死亡率が高いなどのことから母子保健に力を入れているが、近年は飲酒や食事文化の影響で日本同様生活習慣病が出現していることを知った。

○研修期間の生活面について

現地の食事に触れる一方で近隣のインドやタイの食文化にも触れることができた。現地食としては、ブータンのダショーと言われる故人 西岡京治氏が伝えた日本食のものと似た野菜が多く、主食として赤米があった。肉も食べるようだが、多くはない。トウガラシを使ったスパイシーなものが多かった。衣服に関しては男性ではゴ、女性ではキラを身にまとっていた。お手洗いは自分で水洗するものが一般で、建物は 3 階建てが主であった。

○研修期間全般にわたる感想

ブータンでは医師が少ないため、看護師が主として活動している場面が多く、地域に出ると Health Assistant (HA) が健診や健康指導を行っている現状があり、日本とはまた違った医療のシステムに触れることができた。ブータンを訪問する以前に「戦前の古き良き日本」という話を聞いておりそれをイメージしていたが、実際首都ティンブーでは開発が進み、多くのマンションや多くの自動車、それを利用する多くの人々が存在していて、経済成長を徐々に遂げている姿を見ることができた。ブータンは日本とは違い陸つながりの国であるためインドやバングラデシュ、ネパールからの人々が住んでいたり、主としてタイからの観光客も多く文化の触れ合いがある 1 つの国であると感じた。

○今後の勉学計画

今回生まれて初めて海外に行くということで、言語などコミュニケーションの分野が心配であった。実際上手く伝えられなかったこともあったので、言語のスキルアップが重要であると感じた。ブータンでは現代日本のごとく時間に縛られた生活ではなく、解放された生活を送っている者が多く、こういう背景が幸福につながっているのではないかと感じた。しかし日本を大きく変えることは 1 人の力では難しいため、日本の背景に合わせた幸福（GNH）を実現するために、私は地域の健康的な生活や仕事を支える職である保健師を目指して勉学に励みたい。そして他の文化と今後とも触れ合い、様々な場面で柔軟な健康を築いていきたいと考えている。

(写真)

